國學院大學学術情報リポジトリ

武田祐吉博士旧蔵「古今和歌集」秋歌上について：本文と校異

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 笹川, 勲
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002349

武田祐吉博士旧蔵『古今和歌集』秋歌上について
――本文と校異――

笹川　勲

はじめに

武田祐吉博士旧蔵の古典籍は、國學院大學図書館が所蔵する古典籍の中で、その柱のひとつといってよいであろう。博士旧蔵の古典籍については、既に『國學院大學図書館蔵　武田祐吉博士旧蔵善本解題』(1)（以下、『善本解題』）が刊行され、書誌解題および各古典籍につき数葉の書影が掲載されている。また、一部の古典籍については國學院大學國文學會や古事記学会、中古文学会、中世文学会といった本学内外の学会、および「國學院大學学びへの誘い」等の催しにおいて展示され、一般公開される機会も少なくない。しかし、各古典籍の書誌学的文献学的研究は、決して多いとはいえない。管見に入ったものとしては中村啓信氏の『荷田春満訓点古事記』の研究(2)、飯島一彦氏の『梁塵秘抄口伝集』巻十残巻の解題・翻刻・影印(3)、川上新一郎氏の寂恵校合本『古今和歌集』の研究(4)、針本正行氏の『竹取物語絵巻』の書誌解題および翻字・校異を(5)挙げることができる。また、平成一九年度からは、針本氏を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究（B）「物語絵巻の本文とその享受に関する総合的研究―國學院大學所蔵本を中心に―」（課

題番号19320038）が開始された。筆者も作業従事者として本事業に携わっており、前年度は鈴木裕子氏（研究分担者）、大津直子氏（作業従事者）、内野信子氏（同）とともに武田祐吉博士旧蔵『伊勢物語絵巻』（貴一八七四～一八七五）の書誌調査および翻字を行い、研究成果報告書に掲載した。今年度は同じく博士旧蔵の『奈良絵本伊勢物語』（貴一九二〇～一九二二）の翻字作業を進めている。

國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センターでは、学術資産研究部門の研究事業として「國學院大學の学術資産の研究と公開」を行っている。その主旨は、本学図書館所蔵の貴重書に、解説・翻字を付し、図書館のデジタルライブラリーで公開することによって、研究成果を社会に還元することにある。本稿では、現在、國學院大學図書館が所蔵する武田祐吉博士旧蔵の古典籍のうち、『古今和歌集』秋歌上（貴一八五二）を翻字し、考察及び定家本（貞応二年七月廿二日書写奥書本）との校異を付した。デジタルライブラリーでの公開とともに、本誌上においても、その成果を公開する。

一　武田祐吉博士旧蔵『古今和歌集』秋歌上の書誌

國學院大學図書館が所蔵する『古今和歌集』の貴重書は別表に示した通りである。武田祐吉博士旧蔵の『古今和歌集』秋歌上は、鎌倉時代の書写とされ、『古今和歌集』二十巻のうち、巻四のみの零本である。本古典籍の書誌解題は、『善本解題』において、長谷川政春氏が執筆している。その書誌は以下の通りである。

巻子本一巻で、巻第四の秋歌上の部のみを納める。桐箱は新しく、蓋裏に「萬葉史生清賞」と墨書されていて、所蔵者武田博士の筆らしい。縹色鳳凰文緞子表紙。内題は「古今和謌集巻第四」改行して「秋哥上」とある。用

紙は斐紙で、縦21・5cm、横約27・0cmの墨付十九枚からなり、遊紙なし。全長約5m10cm。字高約19・5cm。全巻を金銀切箔散らしの料紙で裏付を施す。流布本と同じ八十首を収め、詠人名は漢字書を原則とし、多くその右下に仮名書注を入れている。また朱筆の注あり。仮名書の歌の右横に細字の漢字書を添える。歌は上下の句に二行分書（わかちがき）している。現状は巻子本であるが、当初は冊子本の粘葉装で、天地を切って巻子本に改装された、虫喰はこの時のもの。さらに剝がして現状に改装し直している。いわゆる改装本である。冊子本であったことは、全巻に墨の裏うつりが認められるからわかる。

本書は定家本系統の貞応二年本に近いが、一部には同系の伊達本にも近い点があり、流布本の一つと考えられる。

ここで注目されるのは、本古典籍の本文について、長谷川氏が、「貞応二年本に近いが、伊達本にも近い点」を指摘していることである。しかしながら、『善本解題』では、それぞれの本文を示して、その異同を説いてはいない。次節において検証してみたい。

二　武田祐吉博士旧蔵本の本文――定家本（貞応二年本）、伊達本との比較――

『古今和歌集』の伝本は主要なものとされる古写本だけでも、定家本、俊成本、雅経本、清輔本、元永本の五系統に分けられるという。[6] この他に高野切をはじめとする古筆切が存在するが、今日、流布本とされているのは定家本である。藤原定家はその生涯で知られているだけで一七回にわたって『古今和歌集』の書写を行ったとされているが、[7] 特に、貞応二年七月二二日の奥書を持つ「貞応本」と嘉禄二年四月九日の奥書を持つ「嘉禄本」はそれぞれ、定家の

後を承ける二条家と冷泉家の証本となった。このうち「貞応本」は、中世においては、歌道における二条家の権威や連歌師の活躍もあって嘉禄本よりも普及し、近世になると版本の底本として、いわゆる流布本の位置を占めることとなった。[8]

一方、「伊達本」は旧仙台藩主伊達家伝来の古写本で、藤原定家の自筆。本文は「嘉禄本」に近いとされる。[9]「貞応本」と「嘉禄本」の大きな相違は、「仮名序」における「あさかやま」歌の有無および「真名序」の有無[10]であるが、「伊達本」は「あさかやま」の歌を「仮名序」に有するところから、「嘉禄本」に近い形態を有していると思量されている。

さて、武田博士旧蔵本と貞応二年本、伊達本との関係はいかなるものなのであろうか。武田博士旧蔵本は「秋歌上」一軸の零本であるため、「仮名序」の「あさかやま」歌の有無および「真名序」の有無を確認することはできない。そこで、まず、武田博士旧蔵本の本文[11]と定家本（貞応二年本。西下経一氏・滝沢貞夫氏『古今集校本』[12]による）との異同を示し、その異同と「伊達本」（久曽神昇氏編、笠間影印叢刊[13]）との異同を見ることにしたい。まず、武田博士旧蔵本と定家本との校異は以下に掲げる箇所である。

		武	定
①169歌	あきゝぬとめにはさやかにみえねともかせのおとにそおとろかれぬる*	お	を
②170詞	あきのたつ日*	の	ナシ
③170作	紀貫之*	紀	ナシ
④175歌	あまのかはもみちをふねにわたせはやたなはたつめのあきをしもまつ*	ふね	はし
⑤176歌	こひ〳〵てあふよはこよひあまのかはきりたちわたりあけすもあらなむ*	ひ	ゐ

⑥178詞　おなし御時の*きさいの宮の哥合哥　の―ナシ
⑦188歌　ひとりぬるとこはくさ葉にあらねともあきくるよゐ*はつゆけかりけり　ゐ―ひ
⑧194歌　ひさかたの月のかつらもあきはなを*もみちすれはやてりまさるらん　なを―猶
⑨209歌　いとはやもなきぬるかりかしらつゆのいろとる木ゝもゝみちあや*なくに　や―へ
⑩224歌　はきの*はなちるらんをのゝつゆしもにぬれてをゆかんさよはふくとも　の―か
⑪243歌　あきの野のくさのたもとの*はなすゝきほにいてゝまねくそてとみゆらん　の―か
⑫248詞　仁和のみかとの*みこにおはしましける時　の―ナシ

（番号は『新編国歌大観』番号、「歌」は和歌本文、「作」は作者名、「詞」は詞書本文を表す。下段の校異は「武」は武田博士旧蔵本、「定」は定家本（貞応二年本）を指す。異同の箇所には*を付した）。

主格の助詞「の」の脱落や、同じ主格の助詞である「の」と「が」の相違、仮名遣の用字法に起因すると思われる「お」と「を」、「ゐ」と「ひ」の相違、「なを」と「猶」のように漢字をを当てるか否かなど、その異同はおおむね意味の変化を促すものではない。しかし、④と⑨の異同は意味の変化を及ぼすものであるから、取り立てて言及したい。④は、定家本では「はし」（橋）となっている箇所が「ふね」（舟）になっている。片桐洋一氏によれば、「はし」が「ふね」となっているのは、尊経閣文庫蔵の清輔本など六条家流の諸本であるという。この異同について片桐氏は「「紅葉を橋とする」という表現が唐突に過ぎたからであろうが、「船」にすれば、紅葉の一葉一葉が、天の河の水に浮かんで橋（船とすべきか…引用者注）に見立てられたのだということになる」[14]と説いている。⑨は、定家本では「あへなくに」となっている箇所が、「あやなくに」となっている。武田博士旧蔵本は注記として「あへなくに」の本文を立てており、『古今集校本』においても、「あやなくに」の本文を有する他本はない。両者の意味上の相違を見てみ

ると、「もみぢあへなくに」は木々が紅葉する意の動詞「もみづ」の連用形「もみぢ」に、「そうすることを十分成し遂げる意、また、押し切ってそうする意」（小学館『古語大辞典』）を表す「あふ」の連用形が接続し、「まだ…ないのに」の意の連語「なくに」が下接して、「（白露が木々を）十分にもみじさせていないのに……」[15]となる。一方、「もみぢあやなくに」では、前者と同じ「もみぢ」に、「無意味だ。かいがない」（小学館『古語大辞典』）を表す「あやなし」の連用形「あやなく」が接続し、完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」が続いている。「に」は連用終止法と解しておく。通釈は「（白露によって木々が、今、紅葉しつつあるのに、これからさらに）紅葉するかいがない」となろうか。再考する余地はあるものの、武田博士旧蔵本の表現に添うならば、このように解せるのではないか、との一案である。

次に、武田博士旧蔵本―定家本の異同に伊達本（略号「伊」）の異同を突き合わせてみる。

		武	定	伊	
①	169歌	お	を	お	武と伊同じ
②	170詞	の	ナシ	ナシ	定と伊同じ
③	170作	紀	ナシ	ナシ	定と伊同じ
④	175歌	ふね	はし	はし	定と伊同じ
⑤	176歌	ひ	ゐ	ひ	武と伊同じ
⑥	178詞	の	ナシ	ナシ	定と伊同じ
⑦	188歌	ゐ	ひ	ゐ	武と伊同じ
⑧	194歌	なを	猶	猶	定と伊同じ
⑨	209歌	や	へ	へ	定と伊同じ

⑩224歌　の―か―か　定と伊同じ
⑪243歌　の―か―か　定と伊同じ
⑫248詞　の―ナシ―ナシ　定と伊同じ

以上の結果をまとめると、まず、武田博士旧蔵本と定家本（貞応二年本）との異同は十二箇所が確認できた。次に、『善本解題』にある長谷川氏の指摘をもとに、伊達家本との異同を確認すると、武田博士旧蔵本と伊達家本が一致する箇所は三箇所であった。それに対して定家本と伊達家本が一致し、武田博士旧蔵本と異なるものは九箇所であった。

むすび

伝本間の遠近を本文異同を基準として見たとき、一致する箇所が三箇所に留まるという事実は、長谷川氏の「一部には同系の伊達本にも近い点があり」という指摘に対して慎重にならざるを得ないように思われる。もとより武田博士旧蔵本が『古今和歌集』全二十巻のうち、わずかに「秋歌上」のみの零本という現実からすれば、武田博士旧蔵本の本文系統を見極めることは、非常に困難なことと思われる。とはいえ、武田博士旧蔵の『古今和歌集』「秋歌上」は、おおむね流布本たる定家本（貞応二年本）系統の本文とみなしてよいと思われる。

注

（1）編集委員会編『國學院大學図書館蔵武田祐吉博士旧蔵善本解題』（角川書店　昭和六〇年）。
（2）中村啓信氏『荷田春満書入古事記とその研究』（高科書店　平成四年）。

（3）飯島一彦氏「〈翻・複〉武田祐吉博士旧蔵『梁塵秘抄口伝集』巻第十残巻解題・翻刻・影印」（『梁塵　研究と資料』第五号　昭和六二年一二月）。
（4）川上新一郎氏『寂恵の古今集研究について』（『斯道文庫論集』三八号　平成一六年二月）、「貞応元年十一月廿日定家奥書本古今集考―寂恵の古今集研究について（続）―」（『斯道文庫論集』三九号　平成一七年二月）。
（5）針本正行氏「竹取物語絵巻の本文」（『國學院大學大学院紀要―文学研究科―』第三八輯　平成一九年三月）。
（6）鈴木宏子氏「古今和歌集」（財団法人五島美術館『やまとうた一千年』五島美術館展覧会図録　平成一七年）。
（7）鈴木宏子氏注（6）前掲論。
（8）西下経一氏「二（二）（8）貞應二年七月廿二日の書寫」（『古今集の伝本の研究』明治書院　昭和二九年。本稿では、パルトス社復刊　平成五年による）。
（9）西下経一氏「二（四）伊達家本」。注（6）前掲書所収。
（10）西下経一氏「二（三）貞應本と嘉禄本」。注（6）前掲書。
（11）武田祐吉博士旧蔵『古今和歌集』「秋歌上」の本文は、國學院大學図書館デジタルライブラリーの画像資料による。
（12）西下経一氏・滝沢貞夫氏『古今集校本』ワイド版（笠間書院　平成一九年）。
（13）久曽神昇氏『古今和歌集　伊達本』（笠間書院　昭和四六年）。
（14）片桐洋一氏『古今和歌集全評釈（上）』七五九～七六〇頁。講談社　平成一〇年。
（15）片桐洋一氏前掲書（13）に同じ。八二五～八二六頁。

【付記】
本稿執筆にあたっては、國學院大學図書館から格別のご配慮をいただきました。記して御礼申し上げます。

【翻刻】

武田祐吉博士旧蔵『古今和歌集』秋歌上（付・校異）

【凡例】

武田祐吉博士旧蔵『古今和歌集』秋歌上（國學院大學図書館現蔵　貴一八五二）を翻字した。翻字に際しては、以下の方針で臨んだ。

一　底本の書写形態をできる限り尊重し、漢字、あて字、かなづかい、畳字等はすべて底本のままとしたが、変体仮名は通行の字体とした。合点は／で示し、判読できなかった箇所は□で示す。

一　歌本文の頭には、『新編国歌大観』（角川書店）の歌番号を付した。

一　西下経一氏・滝沢貞夫氏『古今集校本』（笠間書院　平成一九年　新装ワイド版、初版は昭和五二年）を参照し、その底本となっている二条家相伝本（藤原定家筆貞応二年七月廿二日書写本）との校異をルビで示した。括弧内が二条家相伝本の様態である。なお、一八七番歌の五句目「かきりとおもへは」は、『古今集校本』では「かきりとおもはゝ」となっている。しかしながら、同じ底本を用いた日本古典文学大系の『古今和歌集』や冷泉家時雨亭叢書（朝日新聞社）に収められる貞応二年本で確認したところ、どちらも本文は「かきりとおもへは」であった。よって、本稿では校異とは認めない。

古今和謌集巻第四

秋哥上

あきたつ日よめる

右兵衛督
藤原敏行朝臣 按察使冨士麻呂男

169 あきゝぬとめにハさやかにみえねとも
かせのをとにそ(を)おとろかれぬる

あきの(ナシ)たつ日うへのをのこともかも
のかハらにかはせうえうしけるともに
まかりてよめる 紀(ナシ)貫之つらゆき

170 かはかせのすゝしくもあるかうちよする
なミとゝもにやあきハたつらん

題しらす 讀人不知

171 わかせこかころものすそをふきかへし
うらめつらしきあきのはつかせ

172 きのふこそさなへとりしかいつのまに
いなハそよきてあきかせのふく

173 あきかせのふきにしひよりひさかたの
あまのかハらにたゝぬひはなし

174 ひさかたのあまの(天)かはら(河原)のわたしもり
きみわたりなハかちかくしてよ

又ハきみかゝへらはふなかくれせよ
＼ゐ家本ニたのみの

175 □□あまのかはもみちをふね(はし)にわたせはや

舟俊本 ＼漢河
たなハたつめのあきをしもまつ

176 こひ〳〵てあふよはこよひ(ゐ)あまのかは
きりたちわたりあけすもあらなむ

寛平御時なぬかの夜うへにさふらふを
のこともうたゝてまつれと仰せられける
時に人にかはりてよめる

友則ともの り

177 あまのかハあさせしらなミたとりつゝ
わたりハてねはあけそしにける

おなし御時のきさいの宮の哥合哥（ナシ）

藤原興風藤原のおきかぜ

178 ちきりけんこゝろそつらきたなハたの
としにひとたひあふハあふかは

なぬかの日の夜よめる

凡河内躬恒／みつね

179 とし／織女ことにあふとハすれとたなはたの
ねるよのかすそすくなかりける

180 たなはたにかしつるいとのうちハへて
としのをなかくこひやわたらん（緒）

題不知　素性

181 こよひこむ人にハあはしたなはたの
ひさしきほとにまちもこそすれ

なぬかのよのあかつきによめる

源宗于朝臣

182 いまはとてわかるゝときハあまのかは
わたらぬさきにそてそひちぬる

やうかの日よめる

壬生忠峯みふのたゝみね

183 けふよりハいまこむとしのきのふをそ
いつしかとのミまちわたるへき

題しらす　　讀人しらす

184 このまよりもりくる月のかけみれは
こゝろつくしのあきハきにけり

185 おほかたのあきくるからにわか身こそ
かなしきものとおもひしりぬれ

186 わかためにくるあきにしもあらなくに
むしのねきけはまつそかなしき

187 ものことにあきそかなしきもみちつゝ
うつろひゆくをかきりとおもへハ

188 ひとりぬるとこハくさ葉にあらねとも
あきくるよゐ(ひ)ハつゆけかりけり　□□□□
□□□□□□□
是貞のみこのいへの哥合哥　仁和第二□□□□
母同寛平

189 いつハ＼是貞仁和第二元右中将とはときはわかねとあきのよそ
ものおもふことのかきりなりける
＼の
かむなりのつほに人〳〵あつまりて秋
夜おしむうたよミけるついてによめる
躬恒＼みつね

190 かくはかりおしとおもふよをいたつらに
ねてあかすらん人さへそうき

題しらす　　讀人しらす

191 しらくもにハねうちかハしとふかりの
かすさへミゆるあきのよの月

192 さよなかとよはふけぬらしかりかねの
きこゆるそらに月わたるミゆ
これさたのミこの家の哥合によめる
大江千里

193
月みれはちゝにものこそかなしけれ
わか身ひとつのあきにハあらねと

忠峯／たゝみね

194
ひさかたの月のかつらもあきハなを（猶）
もみちすれハやてりまさるらん

月をよめる　在原元方

195
あきのよの月のひかりしあかけれハ
くらふのやまもこえぬへらなり

人のもとにまかれりけるにきり〳〵すの
なきけるをきゝてよめる

藤原忠房

196
きり〳〵すいたくなゝきそあきのよの
なかきおもひハわれそまされる

これさたのみこの家の哥合哥

敏行朝臣／としゆきの朝臣

197
あきのよのあくるもしらすなくむしハ
わかこともものやかなしかるらん

題しらす　讀人不知

198
あきはきもいろつきぬれはきり〳〵す
わかねることやよるハかなしき

199
あきのよはつゆこそことにさむからし
くさむらことにむしのわふれハ

200
きミしのふくさにやつるゝふるさとは
まつむしのねそかなしかりける

201
あきの野にみちもまとひぬまつむしの
こゑするかたにやとやからまし

202
あきの野に人まつむしのこゑすなり
われかとゆきていさとふらハん

203 もみちはのちりてつもれるわかやとに
たれをまつむしこゝらなくらん

204 ひくらしのなきつるなへにひハくれぬ
とおもふ（思）ハやまのかけにそありける

205 ひくらしのなくやまさとのゆふくれは
かせよりほかにとふ人もなし

はつかりをよめる
元方（在原）

206 まつ人にあらぬものからはつかりの
けさなくこゑのめつらしきかな

これさたのみこのいへの哥合哥
友則（ともの）

207 あきかせにはつかりかねそきこゆなる
たかたまつさをかけてきつらん

題しらす　讀人しらす

208 わかゝとにいなおほせとりのなくなへに
けさふくかせにかりハきにけり

209 いとはやもなきぬるかりかしらつゆの
いろとる木ゝもゝみちあやなくに（あへなくに）

又はあきはきのしたはもいまたもみちあ□
此□ゐ家のみかになし

なくに

210 はるかすミかすみていにしかりかねハ
いまそなくなるあきゝりのうへに

211 よをさむミころもかりかねなくなへに
はきのしたハもうつろひにけり

このうたはある人のいはくかきのもとの人
丸かなりと

寛平御時きさいのみやの哥合哥

菅根延喜八年正月任参議同□□□□

212　藤原菅根朝臣

あきかせにこゑをほにあけてくるふねハ
あまのとわたるかりにそありける

かりのなきけるをきゝてよめる

213　躬恒／みつね

うきことをおもひつらねてかりかねの
なきこそわたれあきのよな〳〵

これさたのみこのいへの哥合哥

214　忠峯／たゝみね

やまさとハあきこそことにわひしけれ
しかのなくねにめをさましつゝ

讀人しらす

215

おくやまにもみちふミわけなくしかの
こゑきくときそあきはかなしき

題しらす

216

あきはきにうらひれをれはあしひきの
やましたとよミしかのなくらん

217

あきはきをしからみふせてなくしかの
めにハみえすてをとのさやけさ

是貞のみこの家の哥合によめる

敏行朝臣／藤原としゆきの朝臣

218

あきはきのはなさきにけりたかさこの
おのへのしかもいまやなくらん

むかしあひしりて侍りける人の秋の
野にあひてものかたりしけるついてに
よめる　躬恒／みつね

219

あきはきのふるえにさけるはなみれハ
もとのこゝろはわすれさりけり

題しらす　讀人しらす

220 あきはきのしたはいろつくいまよりや
ひとりある人のいねかてにする

221 なきわたるかりのなミたやおちつらん
ものおもふやとのはなのうへのつゆ

222 はきのつゆたまにぬかむとゝれハけぬ
よしミん人ハえたなからみよ

ある人のいはくこのうたハならのミかとの御うたなり
と

223 おりてミハおちそしぬへきあきはきの
えたもたわゝにをけるしらつゆ

224 はきのハなちるらんをのゝつゆしもに
ぬれてをゆかんさよハふくとも

これさたのミこの家の哥合によめる

225 文屋のあさやす
あきの野にをくしらつゆハたまなれや
つらぬきかくるくものいとすち

226 題しらす　僧正遍昭
なにめてゝおれるはかりそをミなへし
われおちにきと人にかたるな

僧正遍昭かもとにならへまかりける時に
おとこやまにて女郎花をミてよめる
ふるのいまみち今道

227 をミなへしうしとみつゝそゆきすくる
おとこやまにしたてりとおもへハ

是貞のみこのいへの哥合哥
敏行朝臣／としゆきの朝臣

228 あきの野にやとりハすへしをミなへし
なおむつましミたひならなくに

229　題しらす　をの〻よしき
をミなへしおほかるのへにやとりせは
あやなくあたのなをやたちなん

朱雀院のをミなへしあはせによミて
たてまつりける　本院贈太政大臣　／本院
230　左のおほいまうちきミ
をミなへしあきの野風にうちなひき
こ〻ろひとつをたれによすらん

231　藤原実方朝臣三条右大臣
あきならてあふことかたきをミなへし
あまのかハらにおひぬものゆへ

232　貫之／つらゆき
たかあきにあらぬものゆへをミなへし
なそいろにいて〻またきうつろふ

233　躬恒／みつね
つまこふるしか鹿そなくなるをミなへし
をのかすむの〻はなとしらすや

234
をミなへしふきすきてくるあきかせは
めにハみえねとかこそしるけれ

235　忠峯／たゝみね
人のミることやくるしきをミなへし
あき〻りにのミたちかくるらん

236
ひとりのミなかむるよりハをミなへし
わかすむやとにうへてミましを

ものへまかりけるに人のいへにをみなへし
うへたりけるをみてよめる
兼覧王

237
をミなへしうしろめたくもみゆるかな

あれたるやとにひとりたてれハ

寛平御時蔵人所のをのこともさかのに
はなミんとてまかりたりける時かへる
とてミなうたよミけるついてによめる

平貞文／平さたふん

238 はなにあかてなにかへるらんをミなへし
おほかるのへにねなましものを

これさたのミこのいへの哥合によめる

敏行朝臣／としゆきの朝臣

239 なに人かきてぬきかけしふちはかま
くるあきことにのへをにほハす

ふちハかまをよみて人につかはしける

貫之／つらゆき

240 やとりせし人のかたミかふちはかま
わすられかたきかにゝほひつゝ

ふちハかまをよめる

素性

241 ぬしゝらぬかこそにほへれあきのゝに
たかぬきかけしふちハかまそも

題不知

貞文／平

242 いまよりハうへてたにみしはなすゝき
ほにいつるあきハわひしかりけり

寛平御時きさいの宮の哥合哥

在原棟梁／在原むねやな

243 あきの野のくさのたもとのはなすゝき
ほにいてゝまねくそてとみゆらん

素性法師

244 われのみやあハれとおもはんきり〳〵す
なくゆふかけのやまとなてしこ

題しらす　讀人しらす

245　ミとりなるひとつくさとそハるハみし
あきはいろ〳〵のはなにそありける

246　もゝくさのはなのひもとくあきの野に
おもひたはれん人なとかめそ

247　つきくさにころもハすらんあさつゆに
ぬれてのゝちはうつろひぬとも

248　仁和のミかとのみこ(ナシ)におハしましける時
ふるのたき御らんせんとておハしまし
けるみちに遍昭かはゝのいへにやとり給
へりける時に庭を秋のゝにつくりて御
ものかたりのついてによミてたてまつり
ける　僧正遍昭
さとはあれて人ハふりにしやとなれや
にはのまかきも秋のゝらなる

【別表】國學院大學図書館蔵『古今和歌集』関係貴重書一覧

No.	貴重書番号	書名	編著者・伝称筆者	刊（写）時	西暦	形態（類）	形態数	備考
一	貴五一一	古今和謌集		南北朝時代写		写本	一帖	
二	貴五三一	古今集講次得道［稿本］	富士谷御杖著			稿本	一冊	巻末：古今和歌集巻第五　印記：矢野蔵書、月明荘
三	貴五三二	古今集顕注私鈔［稿本］	前田夏蔭著	文化一四	一八一七	稿本	一冊	
四	貴五八〇	古今和歌集	東常縁筆	室町時代写		写本	一帖	
五	貴九八三―九八四	古今和歌集　貞応本	中山慶親写	天正六写	一五七八	写本	二帖	帙入小本
六	貴九八五	古今和歌集　嘉禄本	中山宣親筆			写本	一帖	
七	貴一〇一一	古今和歌集	岩山民部少輔筆	天文八写	一五三九	写本	一帖	デジタルライブラリー公開中
八	貴一〇一二	古今和歌集　上下	東山義政（足利義政）筆			写本	一帖	
九	貴一〇七七	古今集とほかゝみ	本居宣長著			稿本	一冊	鈴屋之印、月明荘
一〇	貴一一二八―一一二九	古今和歌集		永享二写	一四三〇	写本	二冊	デジタルライブラリー公開中
一一	貴一一三一	古今和歌集　貞応本		正徳四写	一七一四	写本	一冊	
一二	貴一二四〇	古今和歌集	宗柳筆			写本	一帖	
一三	貴一六五八―一六六一	藤井成章国文書稿本二―五　古今倭歌集打聴一―四	藤井成章著			稿本	四冊	

一四	貴一七二八	古今和歌集	姉小路基綱筆	明応七写	一四九八	写本	一帖	
一五	貴一八五一	古今和歌集　鎌倉時代写		鎌倉時代写		写本	一帖	武田本 デジタルライブラリー公開中
一六	貴一八五二	古今和歌集　巻四		鎌倉時代写		写本	一軸	武田本 デジタルライブラリー公開中
一七	貴二一九五	古今和歌集序注	賀茂真淵著	明和三	一七六六	草稿自筆	一軸	
一八	貴二五二〇	古今序註　巻一～十	［聖冏］釈　了誉著	明暦四刊	一六五八	刊本	一冊	京都　村上勘兵衛刊
一九	貴二五五三―二五五九	古今選　一上・下、二上・下、三、四、五	本居宣長編			稿本	七冊	題簽：古今選　一～七
二〇	貴二六〇九	古今和歌集				写本	一冊	
二一	貴二八三七	古今和歌集	二条為定等三筆			写本	一帖	神田道伴極書 デジタルライブラリー公開中
二二	貴三〇〇八	古今和歌集	紀貫之［等］撰　頓阿、兼空筆	延文四写	一三五九	写本	一帖	デジタルライブラリー公開中
二三	貴三一〇四―三一一七	古今和歌集抄　序、一～二十				写本	一四冊	
二四	貴三一四八	古今和歌集	転法輪公敦筆			写本	一帖	デジタルライブラリー公開中
二五	貴三四六九	古今和歌集		室町初期写		写本	一帖	嘉禄二年識語本 デジタルライブラリー公開中

【付記】この一覧表は、平成十六年度國學院大學國文學會秋季大会における、『國學院大學図書館蔵　古今和歌集展示解題目録』等をもとに作成した。